

大学生の主観的幸福感と学校適応感の関係に関する日中比較研究

祁 秋 夢 浅 川 潔 司
(兵庫教育大学)
福 本 理 恵
(東京大学大学院)
南 雅 則
(宝塚市立高司中学校)

本研究では、主観的幸福感について、日本及び中国の大学生を対象とし、質問紙法により、比較検討することを目的とした。そしてその際に、学校適応感による主観的幸福感形成の違いもあわせて検討された。66名の日本人大学生と中国留学生47名が本研究に被調査者として参加した。質問紙は Diener, Emmons, Larsen & Griffin (1985) によって開発された「人生に対する満足尺度」と Lyubomirsky & Lepper (1999) によって開発された「主観的幸福感尺度」及び Hills & Argyle (2002) によって開発された「オックスフォード・幸福感尺度」が用いられた。学校適応感の測定のためには、吉田他 (2002) により開発された尺度が用いられた。主たる分析結果は以下の通りであった。①主観的幸福感の全体得点に日中間の有意差は認められなかったが、その下位尺度の「自己効力感」、「ポジティブな感情体験」と「人生の満足度」においては日中間に有意差があった。②学校適応感の高かった学生は低かった学生に比べ、主観的幸福感が高かったことが明らかとなった。これらの結果について、学校心理学的な観点から考察が加えられた。

キーワード：主観的幸福感, 学校適応感, 大学生, 日中比較

祁 秋夢：兵庫教育大学大学院・学校教育学専攻，〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1 E-mail：qiqiumeng@gmail.com
浅川 潔司：兵庫教育大学大学院・臨床・健康教育学系・教授，〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1 E-mail：kasa@hyogo-u.ac.jp
福本 理恵：東京大学大学院先端科学技術研究センター，〒671-0251 兵庫県姫路市花田町上原田
南 雅則：宝塚市立高司中学校・教諭，〒665-0868兵庫県宝塚市中山荘園3-10 E-mail：nanchangenki@nifty.com

Relation between Filling of School Adjustment and Subjective Well-Being in Students: Japan and China Cross-national Study

Qiumeng Qi and Kiyoshi Asakawa
(*Hyogo University of Teacher Education*)

Rie Fukumoto
(*The University of Tokyo*)

Masanori Minami
(*Takatsukasa Junior High School*)

The present study was designed to investigate how students' filling of school adjustment relate with their subjective well-being in Japanese and in Chinese. Sixty-six Japanese college students and forty-seven Chinese college students studying abroad at Japanese college took part in the study. For the measurement of the subjective well-being, the Satisfaction with Life Scale (Diener, Emmons, Larsen & Griffin, 1985), Subjective Happiness Scale (Lyubomirsky & Lepper, 1999) and Oxford Happiness Questionnaire (Hills & Argyle, 2002) were used. Furthermore, the students' filling of school adjustment was measured by Student Adjustment Scale (Yoshida, et al, 2002). The main results are as follows:

- (1) There was no significant difference between the Japanese and Chinese college students on general scores of Subjective well-being. But significant differences between Japanese and Chinese college students were found in the mean scores of subscales.
- (2) The filling of school adjustment was significant positive impact on subjective well-being of college students.

Those results were discussed from a viewpoint of school psychology.

Key Words: Subjective well-being, Filling of school adjustment, College students, Japan-China comparison

Qiumeng Qi : Graduate School of Education, Master's program in School Psychology, Hyogo University of Teacher Education, 10-205, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1415 Japan. E-mail: qiqiumeng@gmail.com

Kiyoshi Asakawa : Professor, Development of Clinical Health and Special Support Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato-city, Hyogo 673-1494 Japan. E-mail: kasa@hyogo-u.ac.jp

Rie Fukumoto: Department of Advanced Interdisciplinary Studies, The University of Tokyo, Kamiharada, Hanada, Himeji-city, Hyogo, 671-0251 Japan.

Masanori Minami : Takatsukasa Junior High School, 3-10 Nakayamashoen, Takarazuka-city, Hyogo 665-0868 Japan.
E-mail : nanchangenki@nifty.com

問題と目的

古代ギリシャ時代からあるハッピーネスという概念は、現代の心理学において必要とされるテーマの一つである (Hoom, 2008)。このハッピーネスを含む主観的幸福感 (Subjective Well-Being, 以下 SWB とする) という概念化についての研究が進んでいる。SWB は 3 つの概念から構成されている。それは①人生満足度 (人生における認知的評価)、②ポジティブな感情に関する経験、③ネガティブな感情に関する経験の欠如である。つまり、人生に満足していたり、ポジティブな感情を経験したり (例えば、喜びや愛情など)、あまりネガティブな感情を有しない (例えば、心配や悲しみなど) とすると、その人の SWB のレベルが高いと言える (Suh & Oishi, 2002)。実際に、SWB は人々の感情的反応、領域的満足感、そして、人生満足度における判断といった現象を含んでいる (Diener, 1999)。

一方、学校適応感は従来より、生徒の発展や成功という観点から構成されている (Brich & Ladd, 1996)。広義の意味において、適応とは、生徒の発展や成功だけではなく、彼らが示す学校、不安、孤独、ソーシャルサポート、学業的動機 (例えば、学業従事、学業回避、不登校など) に対する姿勢も含まれている (Birch & Ladd, 1996; Roeser, 1998; Roeser et al., 1998)。先行研究においては、人間関係は学校適応感に大きな役割を果たしていると主張されている (Birch & Ladd, 1996; Ladd & Kochenderfer, 1996)。しかし、生徒の学校適応感が SWB に対して影響を与えるのかといった視点からの研究は見られない。そこで、本研究では、SWB と学校適応感の関連を検討することとした。

SWB と学校適応感の研究は日常の学校生活をもとに行われている。学校存在の意義は、社会での必要なスキルや原則を効果的な手段で、若者たちに教えることにある。学校とは生徒の個々の将来性を実現し、生徒自身と社会を発展させ、そして生活を満足のいくようにサポートする存在である。学校を機能させ、学習に従事させるには、生徒が SWB を感じる必要がある (Thuneberg, 2007)。学校での SWB を分析した従来の研究では、幸せを感じる生徒は柔軟で且つ効率的に問題を解決するとされ、失敗を避けるよりも目標や成功を求める傾向がある (Lyubomirsky, 2001) という。また、近年心理学の考え方を基にして生まれた新たな分野である、ポジティブ心理学 (Seligman & Csikszentmihalyi, 2000) は、科学的理解をもって、個人や家族また社会における成長を手助けするものであるが、ポジティブ心理学において、ハッピーネスは人間のあらゆる機能を超えて成功を導くものとされている (Myers, 1992)。

異文化では、SWB のレベルが違うとされており、多くの学者は、国によって人々がどの程度 SWB を経験し

ているかに違いがあるだけでなく、SWB の理想的なレベルも違うと主張している (Suh & Oishi, 2002)。そこで、本研究では、まず日本人と中国人大学生の SWB を検討した。さらに、学校適応感の水準によって、日中学生の主観的幸福感の形成に差異が生じるか否かという点についてもあわせて検討した。

方法

調査対象者

近畿圏の 4 年制大学に在籍する日本人大学生と中国人留学生合計 113 名が本研究に参加した。

そのうちわけは、日本人学部生 66 名 (男子: 14 名, 女子: 52 名), 中国人留学生は学部生 16 名 (男子: 2 名, 女子: 14 名), 大学院生 31 名 (男子: 8 名, 女子: 23 名) であった。

質問紙の構成

主観的幸福感尺度の妥当性を確認するため、以下 3 つの尺度を利用した。

「人生に対する満足尺度」(Diener, Emmons, Larsen & Griffin, 1985) は幸福概念として定義されて、5 つの項目から単一の人生満足感得点を求めている尺度である。「全然あてはまらない」から「非常によくあてはまる」の 7 件法によって求められた。本研究では、角野 (1994) が作成した日本語版が使用された。

「主観的幸福感尺度」(Lyubomirsky & Lepper, 1999) は主観的幸福感を単一の要因からなる比較的小数の項目 (4 つ) で測定できる尺度である。7 件法で回答が求められた。本研究では、島井・大竹・宇津木・池見 & Lyubomirsky (2004) が作成した日本語版が使用された。

「オックスフォード・幸福感尺度」(Hills & Argyle, 2002) は幸福感をさまざま側面から捉えようとする、29 項目にからなる尺度である。「全くそう思わない」「少しそう思う」「かなりそう思う」「非常にそう思う」の 4 件法で回答が求められた。これは英語に堪能な日本人が日本語に翻訳し、英語原文を読んでいない別の日本人がバックトランスレーションした内容が原文の英文の項目と全く同一であることを確認することで、日本語版が完成されたものであった。

「大学生用学校適応感尺度」は、吉田・鈴木・古川・浅川・東 (2002) によって作成された 28 項目にからなる尺度である。回答形式は「全く当てはまらない」「あまり当てはまらない」「かなり当てはまる」「とてもよく当てはまる」の 4 件法である。

質問紙中国語版の作成には、英語に堪能な中国人が英語を中国語に翻訳し、英語原文を読んでいない別の中国人がバックトランスレーションした内容が原文の英文の項目と全く同一であることを確認するという手続きをとっ

た。

手続き

日本人学生に対しては、集団場面で質問紙が配布され、調査が実施された。中国人留学生に対しては、質問紙が個別に配布され、質問紙に対して回答するように求められた。回答後の質問紙は研究者によって回収された。

調査時期

2010年7月上旬に実施された。

結果

主観的幸福感尺度の因子分析

SWBの3つの尺度について因子構造を確認するため、因子分析（主因子法・Promax回転）を行った。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から、人生に対する満足尺度と主観的幸福感尺度は1因子を抽出した。オックスフォード・幸福感尺度は解釈可能な3因子が抽出された。その内容はTable 1～3に示す通りである。

オックスフォード・幸福感尺度の29項目に対して、解釈可能な3因子が抽出された。十分な因子負荷量を示さなかった6項目を分析から除外し、再度因子分析（主因子法・Promax回転）を行った。その結果はTable 3のとおりである。

第I因子は12項目で構成されており、「私は自分の望む通りどんなことでもできる」、「私は何でも手に入れることができると思う」などの項目が含まれていた。そこで「自己効力感」因子と命名された。

第II因子は5項目で構成されており、「私は過去にとりたてて幸せだと感じた思い出はない」、「私は人と一緒にいても楽しくない」などの項目群である。そこで「ポ

ジティブな感情体験」因子と解釈された。

第III因子は6項目で構成されており、「私は自分の人生を特には思い通りにしていないと思う」、「私は自分の生き方にあまり満足していない」などの項目から、「人生の満足度」因子と命名された。

尺度の信頼性を検討するために、Cronbachの α 係数を算出した。その結果、人生に対する満足尺度は $\alpha=.76$ 、主観的幸福感尺度は $\alpha=.78$ であった。オックスフォード・幸福感尺度の全体的尺度は $\alpha=.87$ 、第I因子は $\alpha=.89$ 、第II因子は $\alpha=.76$ 、第III因子は $\alpha=.76$ であった。 α 係数は高い値を示しており、各尺度の内的整合性に問題がないと考え、これを以下の分析に用いた。

オックスフォード・幸福感尺度と他の尺度との相関

3つの尺度の相関係数を見ると、人生に対する満足尺度と主観的幸福感尺度及びオックスフォード・幸福感尺度の相関係数は.61と.62であった、主観的幸福感尺度とオックスフォード・幸福感尺度の相関係数は.70であった。つまり、3つの尺度の相関は高い相関関係にあるといえる。このことから、オックスフォード・幸福感の尺度は、主観的幸福感を測定するに足る尺度と考えられた。今回は、人生に対する満足尺度と主観的幸福感尺度から抽出された、それぞれの因子がオックスフォード・幸福感尺度の3因子に含まれてるとし、 α 係数が高いオックスフォード・幸福感の尺度を「主観的幸福感尺度」に採用して、分析がなされた。

大学生用学校適応感尺度の因子分析

大学生用学校適応感尺度について因子構造を確認するために、因子分析（主因子法・Promax回転）を行った。明らかのように、解釈可能な4因子が抽出された。十分

Table 1 人生満足度尺度の因子分析

	I
2 私の人生は、とてもすばらしい状態だ	.79
1 大体において、私の人生は私の理想に近い	.77
3 私は、自分の人生に満足している	.74
5 人生をもう一度やり直せるとしても、変えたいことはほとんどない	.48
4 私はこれまでの人生の中で、こうしたいと思った重要なことはなしとげてきた	.43

Table 2 主観的幸福感尺度の因子分析

	I
1 全般的にみて、あなたは自分のことをどの程度幸せであると考えていますか？	.90
2 あなたは、自分と同年輩の人と比べて、自分をどの程度幸せであると考えていますか？	.87
3 全般的にみて、非常に幸福な人たちがいます。この人たちは、どんな状況のなかでもそこで最良のものをみつけて、人生を楽しんでいる人たちです。あなたは、どの程度、そのような特徴をもっていますか？	.64
4 全般的にみて、うつ状態にあるわけではないのに、はたから考えるよりも、まったく幸せではないようです。あなたは、どの程度、そのような特徴をもっていますか？*	.42

* は逆転項目

Table 3 オックスフォード・幸福感尺度の因子分析

	I	II	III
【自己効力感】 $\alpha=.89$			
18 私は自分の望む通りどんなことでもできる	.81	-.33	.06
20 私は何でも手に入れることができると思う	.76	-.36	-.02
26 私はたいてい物事を良い方向へもっていく	.72	.00	-.04
25 私は活力に満ちあふれている	.72	-.02	.05
8 私はいつも何かに専念し、夢中になっている	.70	-.15	.09
7 私はどのようなことにでも、楽しさを感じる	.62	.15	-.05
12 私は自分の人生のあらゆるものにとっても満足している	.61	.12	.13
17 私はいつも人に元気を与える	.53	.25	-.23
9 人生はいいものだ	.53	.31	.03
4 私はほとんどの人に対して温かい気持ちになる	.50	.31	-.12
22 私はよく喜びを感じ、とても得意な気持ちになる経験をする	.46	.31	-.19
15 私はとても幸せだ	.45	.32	.23
【ポジティブな感情体験】 $\alpha=.76$			
29 私は過去にとりたてて幸せだと感じた思い出はない*	-.19	.88	-.04
27 私は人と一緒にいても楽しくない*	-.04	.73	.01
11 私はよく笑う	.15	.67	-.12
28 私は特に自分が健康だとは感じない*	-.23	.58	.32
16 私はなにかを見て美しいと思うことがある	.31	.44	-.05
【人生の満足度】 $\alpha=.76$			
19 私は自分の人生を特には思い通りにしていないと思う*	.04	.08	.66
1 私は自分の生き方にあまり満足していない*	.16	.28	.64
14 私がやりたいこととこれまでやってきたこととの間にはギャップがある*	-.14	-.03	.63
5 私はすっかりした気分で目覚めることはあまりない*	-.13	.02	.55
23 私は何かを決断することが簡単ではないと思う*	-.02	-.14	.54
13 私は自分が魅力的に見えるとは思わない*	.28	-.16	.51
因子相関行列	I	II	III
I	-	.38	.04
II		-	.33
III			-

* は逆転項目

な因子負荷量を示さなかった7項目を分析から除外し、再度因子分析（主因子法・Promax 回転）を行った。結果は Table 4のとおりである。

第I因子は6項目で構成されており、「私のコースの担任は、私の勉強を評価してくれる」、「私のコースの担任は、私のことをよく思っている」などの項目が含まれていた。そこで「学業評価」因子と命名された。

第II因子は5項目で構成されており、「私は最近、イライラしがちだ」、「私は最近、なんとなく不安になる」などの項目群である。そこで「メンタルヘルス」因子と命名された。

第III因子は5項目で構成されており、「私は最近、一生懸命自分の勉強をしている」、「私は最近、勉強する気があまりしない」などの項目から、「学習意欲」因子と命名された。

第IV因子は5項目で構成されており、「私は、自分の大学内に何でも話せる友だちがいる」、「私は、自分の大

学の友だちと勉強以外の面でも個人的なつきあいがある」などの項目から、「対人関係」因子と命名された。

尺度の信頼性を検討するために、Cronbachの α 係数を算出した。その結果、全体的尺度は $\alpha=.85$ 、第I因子は $\alpha=.84$ 、第II因子は $\alpha=.84$ 、第III因子は $\alpha=.77$ 、第IV因子は $\alpha=.70$ であった。 α 係数は高い値を示しており、各尺度の内的整合性に問題がないと考え、これを以下の分析に用いた。

国別・学校適応感による分析

大学生用学校適応感尺度得点を、最低値から平均値-1/2S.D.をL群、平均値-1/2S.D.から平均値+1/2S.D.をM群、平均値+1/2S.D.から最高値をH群とする3群に分けた後、「主観的幸福感尺度」の合計得点および各下位尺度得点合計得点を学校適応感3群（L群・M群・H群）と国別（日本・中国）に整理した（Table 5参照）。

学校適応感とSWBの関連を検討するため、主観的幸福感尺度の合計得点及び各下位尺度の得点をそれぞれ従

Table 4 大学生用学校適応感尺度の因子分析

	I	II	III	IV
【学業評価】 $\alpha=.84$				
21 私のコースの担任は, 私の勉強を評価してくれる	.79	.08	-.05	.03
6 私のコースの担任は, 私のことをよく思っている	.78	-.07	-.13	.03
7 私は, この大学での勉強が楽しい	.74	.11	.15	-.21
12 私の大学の先生たちは, 私のことをよく思っている	.68	-.14	.06	.02
3 私の大学の先生たちは, 私の勉強を評価してくれる	.48	-.04	.32	.16
13 この大学で私が受ける授業は, 私の勉強に役立つ	.47	.11	.13	.00
【メンタルヘルス】 $\alpha=.84$				
28 私は最近, イライラしがちだ*	-.17	.80	.14	.14
17 私は最近, なんとなく不安になる*	.18	.76	-.04	-.03
23 私は最近, 感情の変化が激しい*	.09	.70	.16	-.05
5 私は最近, ゆううつになりがちだ*	-.20	.69	-.03	.07
11 私は最近, 神経質になってきた*	.13	.64	-.24	-.02
【学習意欲】 $\alpha=.77$				
10 私は最近, 一生懸命自分の勉強をしている	-.03	-.14	.80	.01
22 私は最近, 勉強する気があまりしない*	-.06	.08	.74	-.23
27 私は卒業するまでに, 価値のある学習成績をあげる自信がある	.09	.01	.64	-.04
16 私はこの大学で勉強を続けていく私の能力に自信がある	.12	.15	.53	.05
9 私の授業での発表は, 授業の中で評価されている	.28	-.23	.42	.23
【対人関係】 $\alpha=.70$				
8 私は, 自分の大学内に何でも話せる友だちがいる	-.31	.04	.24	.69
20 私は, 自分の大学の友だちと勉強以外の面でも個人的なつきあいがある	-.08	.03	-.12	.63
2 私は, 人とつきあおうと思う	.22	.01	-.12	.58
14 私が話すとき, 人は私に心を開いてくれる	.25	.12	-.05	.44
25 私は, 集団に参加することができる	.29	-.01	-.18	.43
因子相関行列	I	II	III	IV
I	-	.20	.43	.32
II		-	.30	.12
III			-	.27
IV				-

* は逆転項目

Table 5 国別・大学適応感水準別による主観的幸福感各下位尺度平均得点

	日 本						中 国					
	L群 (N=17)		M群 (N=31)		H群 (N=18)		L群 (N=16)		M群 (N=18)		H群 (N=13)	
	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.	M	S.D.
自己効力感	24.88	6	28.32	5.18	32.89	6.49	30.31	5.62	33.39	4.06	37.23	5.26
ポジティブ感情体験	15.94	3.46	18.26	1.32	18.94	1.35	14.38	2.63	16.56	1.978	17.77	1.48
人生の満足度	15.24	3.53	17.48	2.58	18.67	4.09	14.06	2.41	14.44	2.46	16.23	2.59

属変数とし, 2 (国別) × 3 (学校適応感3群) とする2要因分散分析を行った。

その結果, SWBの合計得点において学校適応感水準の3群に主効果 ($F_{(2, 107)}=24.51, p<.001$) が認められ, Tukey法による下位検定を実施したところ, H群 > M群 > L群の関係で有意差が認められた。(“>”は5%水準で有意差があったことを示す。) なお, 国による有意差は認められなかった。

下位尺度別に同様の分散分析を行ったところ, 「自己効力感」において有意な国の主効果 ($F_{(1, 107)}=21.67, p<.001$) が認められ, 自己効力感得点では日本人学生群に比べて中国人学生群が有意に高かった。

「ポジティブな感情体験」においては, 国の主効果 ($F_{(1, 107)}=13.15, p<.001$) が認められ, ポジティブな感情体験得点では中国人学生群に比べて日本人学生群が有意に高かった。

「人生の満足度」においては、国の主効果 ($F_{(1, 107)} = 14.53, p < .001$) が有意であり、人生への満足度得点では国人学生群に比べて日本人学生群が有意に高かった。

考察

日本と中国の大学生の SWB は総合的な得点だけを見ると、日中の学生群間に有意な差は見られなかった。中国、日本、イギリスの学生を対象に、幸福感の比較研究を行った (Furnham & Cheng, 1999) によれば、イギリス人学生群と日本人学生群、中国人学生群との間に有意差があるが、日本人学生群と中国人学生群の間には幸福感得点の差がないという報告をしていた。したがって、本結果は主観的幸福感の全体尺度得点についてみれば日中間の差はないという事実を示しており、Furnham & Cheng (1999) の見解を支持するものといえる。

しかし、主観的幸福感尺度の因子別に見ると、自己効力感においては、日本人学生群より中国人学生群の得点が高いことが多かった。その中の項目では、積極性、自信、責任感などの項目は中国人学生群の得点が高く、いわゆるプライドの高さが示されている。日本に来る中国留学生は、中国においては、大学生のエリートである。なぜなら、同級生に比べて、成績上位の学生のみが留学可能になることが多いからである。このような経緯からすれば、人生に対して、自己効力感が日本人学生に比べて留学生が全員を占める中国人学生群で高くなると考えることは妥当であろう。

ポジティブな感情体験と人生の満足度においては、自己効力感とは逆に、中国人学生群の得点よりも日本人学生群の得点が高いことが多かった。主観的幸福感の国別調査 (Suh, Diener, Oishi, & Triandis, 1998) によれば、人生満足度 (1~7点) において、中国人群は平均得点が3.3点、日本人群のそれは4.0点であり、生活の満足度や幸福感は中国人より日本人が高いと報告されていた。日本人学生は現実の日常生活に対する満足度が高いので、同時に幸福感も高くなると考えるのは妥当であろう。また、中国人学生は、留学して異文化の環境や生活面だけではなく、学習面においてリアリティ・ショックを始め種々の苦勞に直面する。そのことが、本結果に反映しているとも考えられる。

学校適応感の合計得点によって分類された H 群、M 群、L 群の順に SWB 得点も高かったが、これは学校適応感の水準が SWB に明らかに関連したためであると考えられる。嚴・鄭・邱 (2003) が既に報告したように、SWB の影響要因のうち、ポジティブな感情が一番有意な影響を及ぼすことが明らかである。調査の対象者は大学生であり、学校適応感が高いのであれば、学校からポジティブな評価を受け、それに伴って肯定的な感情も醸成されよう。これらのことから、自己に対する充実感や

満足感というポジティブな感情にあふれていると捉えることによって、幸せであると感じていると受け止められた可能性がある。したがって、学校適応感の高かった学生は低かった学生に比べ、主観的幸福感が高かった。本結果は嚴・鄭・邱 (2003) の結果を支持するものといえる。

今後の課題

本結果に見られた日中学生群間の差異は、既述の通り、中国人学生群の全員が留学生であった、という事実由来するかもしれない。よって、SWB において、厳密に日中学生群間に存在するかもしれない差異について検討するためには、中国国内の大学に在籍する学生群と日本国内の日本人学生群とを比較、検討する必要があることを本結果は示唆していると思われる。

引用文献

- Birch, S. H., & Ladd, G. W. (1996). Interpersonal relationships in the school environment and children's early school adjustment: The role of teachers and peers. In J. Juvonen & K. R. Wentzel (Eds.), *Social motivation: Understanding children's school adjustment* (pp.199-255). NY: Cambridge University Press.
- Cha, K. (2003). Subjective well-being among college students. *Social Indicators Research*, 62, 63, 455-477.
- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, 49(1), 71-75.
- Diener, E., Suh, E. M., Lucas, R. E., & Smith, H. L. (1999). Subjective Well-Being: Three Decades of Progress. *Psychological Bulletin*, 125 (2), 276-302.
- Diener, E., Oishi, S., & Lucas, R. E. (2003). Personality, culture and subjective well-being: emotional and cognitive evaluations of life. *Annual Review of Psychology*, 54, 403-425.
- Farmer, T. W., Irvin, M. J., Thompson, J. H., Hutchins, B. C., & Leung, M. (2006). School adjustment and the academic success of Rural African American early adolescents in the deep south. *Journal of Research in Rural Education*, 21(3), 1-14.
- Furnham, A., & Cheng, H. (1999). Personality as predictor of mental health and happiness in the East and West. *Personality and Individual Differences*, 27, 395-403.
- 角野 善司 (1994). 人生に対する満足尺度 (the Satisfaction With Life Scale [SWLS]) 日本版作成の試し. 日本教育心理学会第36回大会発表論文集, 192.
- Hills, P., & Argyle, M. (2002). The Oxford Happiness Questionnaire: a compact scale for the measurement of psychological well-being. *Personality and Individual Differences*, 33, 1073-1082.

- Horn, A. A. J. (2008). A short introduction to subjective well-being: its measurement, correlates and policy uses, *Statistics, Knowledge and Policy 2007: Measuring and Fostering the Progress of Societies*, Chapter 15, 215–229.
- Khramtsova, I., Saarnio, D. A., Gordeeva T., & Williams, K. (2007). Happiness, life satisfaction, and depression in college students: relations with student behaviors and attitudes. *American Journal of Psychological Research*, 3(1), 8–14.
- Ladd, G. W., & Kochenderfer, B. J. (1996). Linkages between friendship and adjustment during early school transitions. In W. M. Bukowski, A. F. Newcomb, W. W. Hartup (Eds.) *The company they keep: Friendship in childhood and adolescence* (pp.322–345). NY: Cambridge University Press.
- Lyubomirsky, S., & Lepper, H. S. (1999). A measure of subjective happiness: preliminary reliability and construct validation. *Social Indicators Research*, 46, 137–155.
- Myers, D. G. (1992). *The pursuit of happiness*. New York: Morrow.
- Roeser, R. W. (1998). On schooling and mental health: Introduction to the special issue. *Educational Psychologist*, 33, 129–133.
- Roeser, R. W., Eccles, J. S., & Sameroff, A. J. (1998). Academic and emotional functioning in early adolescence: Longitudinal relations, patterns, and prediction by experience in middle school. *Development and Psychopathology*, 10, 321–352.
- Schunk, D. H., Pintrich P. R., & Meece, J. (2008). School adjustment, *Motivation in Education: Theory, Research, and Application*, 3rd Edition, 278–280.
- Seligman, M. E. P., & Csikszentmihalyi, M. (2000). Positive psychology: an introduction. *American Psychologist*, 55 (1): 5–14.
- 島井 哲志・大竹 恵子・宇津木 成介・池見 陽 & Lyubomirsky, S. (2004). 日本版主観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale: SHS) の信頼性と妥当性の検討. 日本公衛誌. 第51巻. 第10号. 845–852.
- Suh, E., Diener, E., Oishi, S., & Triandis, H. C. (1998). The shifting basis of life satisfaction judgments across cultures: Emotions versus norms. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 482–493.
- Suh, E. M., & Oishi, S. (2002). Subjective well-being across cultures. *Online Readings in Psychology and Culture*, Unit 7, Chapter 1.
- Thuneberg, H. (2007). Is a majority enough? Psychological well-being and its relation to academic and prosocial motivation, self-regulation and achievement at school. *University of Helsinki Research Report*, 281.
- Uguak, H. A., Elias, H., Uli, J., & Suandi, T. (2006). Academic adjustment and psychological well-being among students in an international school in Kuala Lumpur, Malaysia. *Jurnal Pendidikan*, 127–139.
- 山田 裕章・冷川 昭子・峰松 修 (1994). 日本と中国の大学生の精神的健康度の比較「いきいき」健康調査表を用いて. 健康科学, 第16巻, 99–104.
- 嚴 標賓・鄭 雪・邱 林 (2003). 大学生主観的幸福感の跨文化研究: 来自48个国家 and 地区的調査報告. 心理科学, 第26巻, 第5期, 851–855.
- 吉田 幸世・鈴木 啓嗣・古川 雅文・浅川 潔司・東 紀美子 (2002). 女子大学生の大学適応と将来展望に関する心理学的研究(1). 日本進路指導学会第24回研究大会発表論文集, 22–23.

謝 辞

本研究を進めるにあたって、調査に快くご協力くださった日中両国の学生・教職員の皆様に心よりお礼申し上げます。

(2010. 9. 1 受稿, 2010. 12. 16 受理)